自分流　枕草子

2−7−11　S.S

春は緑。

白き雪が融けて、

やうやう暖かくなるころの来たる。

大地に創造の魔法をかけたやうに、

種をまくなり。

やがて小さき芽が生え始めて美し。

冬眠から覚めた

強い生命力を持つ動物たちは、

をりふし樹洞から頭を出しつつ、

生き生きな世界を望むさえあわれなり。

夏は青。

いとど芽が成長して

大きくなるのはさらなり、

海もなほ、

ビーチで涼しき海風を浴びて、

冷たきかき氷をシャキシャキと、

不規則な音を出しながら

食べるはをかし。

海面に倒影した真澄の青空が

すっきり見ゆる浅き所で

泳ぐもをかし。

秋は赤。

畑は作物に満ちて、

種類たくさん収穫能ふ。

お互いに自分は一番なりと

表現したるは、

はた言ふべきにあらず。

殊に私が好むものは、

紅葉なり。

いとめでたし時期の過ぎて、

葉落つるころは、

地面を赤き絨毯とひがめぬ。

冬は白。

寒さに耐えて布団から出でて、

窓を開きけり。

外の空気はいと新鮮でをかし。

ひたと全景を見れば、

何もかもが真っ白になりたる。

ただ、一つ二つなど、

雪だるまの立ちたる姿はいとをかし。

されど、普段と全くさまかへた様子

になりて、あわれなり。